
二匹のカメの話

たみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二匹のカメの話

【Nコード】

N7782S

【作者名】

たみ

【あらすじ】

僕がなぜカメを好きなのか、説明します。子供のころの思い出話。

もし「好きな動物は？」と聞かれたら、友人宅の愛らしいネコの魅力とひとしきり戦ったあとで、私はカメを選ぶだろう。私が七歳か八歳の時、妹の強い要望により、我が家に二匹のカメがやってきた。私たちは母とカメの世話に関するいくつかの約束をしたあとで一匹ずつ名前を付けた。少し小さめの緑色はゼニちゃんになり、わずかに頭がとがった藍色はモモちゃんになった。そして彼らは家族の一員になった。

カメをよく知らない人のために、私の力の及ぶかぎり、彼らの魅力を語ってみたいと思う。

あなたが庭の水槽でカメを飼っているとしよう。カメはひなたぼっこ用の石の上で、ぼけーっと空を眺めている。まるで縁側のおじいちゃんのような。しかし彼の顔を覗き込むと、しわくちやの顔の中に、黒くつややかに光る二つの瞳が見えるだろう。意外に強い輝きに、あなたは驚くかもしれない。

あなたは水槽の掃除のために、ひなたぼっこをしているカメを庭に放す。カメはおもむろに庭の土を掘り返し、穴の中を覗き込む。あなたが鼻歌を歌いながら水槽を洗っている間、敬虔な神父が神に祈るように、じっとそうしている。

あなたはこう思うだろう。「いったい何を考えているんだろう？」カメがしばしば思慮深い哲学者にたとえられるのがよくわかる。

そして実際、彼らは何かを考えている。

私たち兄妹は、ゼニちゃんとモモちゃんと一緒に育った。

カメは積極的にコミュニケーションを取る生物ではまったくないので、一緒に遊んだりといった記憶はないが、その代わりに、常にそばにいてくれた。私たちが宿題をしたり、ゲームをしたり、ゲー

ムの勝ち負けによる口喧嘩からのリアルファイトに発展したりしていたとき、ゼ二ちゃんとモモちゃんは同じ水槽の中でいつでも空を見上げていた。

「ねえねえお兄ちゃん、面白いよ」ある日、妹の言葉に、私が水槽を覗いてみると、ゼ二ちゃんとモモちゃんがトーテムポールのように重なって、ひなたぼっこ用の石の上で目を細めていた。とても素敵な光景だった。彼らは大人しく、常に何かを考えていて、他者を排除しようとしなかった。彼らはどんなときでも、一つの石を分け合うことができた。私はますます彼らを好きになった。

ゼ二ちゃんがいなくなつたのは、それからしばらく経つたある日のことだった。

ある夏の朝（たしか休日だった）、私が寢床でごろごろしていると、階下から母の声が響いてきた。

「ゼ二ちゃんいなくなってるよ！」

「え？」

「水槽にも庭にもいないみたい」

私が慌てて庭に出てみると、確かに水槽にはモモちゃんしかいなかった。家族全員で探したが、見つからなかった。

いったいどうやって水槽から出たのか、さっぱりわからなかった。プラスチック製の水槽は滑りやすく、爪をかけられないようになっていて、壁は彼らの体長の一・五倍はあった。ジャンプでもしない限り出られないだろう（もちろん、カメは跳べない）。実際、家族の誰一人として、まさか彼らが脱走するとは思ってもみなかった。しかしとにかく、ゼ二ちゃんはやりおおせたのだ。周りをいやらしく覆う青い壁を乗り越え、自由の広がる外に飛び出していったのだ。私は、自分がカメを侮っていたことを悟った。ゼ二ちゃんが脱走の方法をずっと考えていたのだと信じた。彼らは、やる時にはやるのだ、と思った。私の頭の中に、小さな手足を動かして、必死に海を目指すゼ二ちゃんが浮かんだ。ゼ二ちゃんは怠惰な安住の地を捨て、大いなる海原を目指して歩いていくために、ずっと牙を研いで

いたのだ。そして、これ以上ないタイミングで、どうにかして壁を乗り越え、何が起るかわからない外の世界に身を投じたのだ。これほどの勇気と決断を、私はそれまで見たことがなかった。幼い私は、ほとんど雷に打たれたようになりながら、ゼニちゃんがどうか海にたどり着けますようにと、心の底から願った。

あれから十年以上が経った今でも、たまにゼニちゃんのことを考える。当時は魔法のように思えたゼニちゃんの消失も、今はそれほど不思議でもなくなった（たぶん皆さんも想像がついているだろう）。しかし、今でもゼニちゃんが残してくれたものは私の中に息づいているし、海とは言わないまでも、近所の池ぐらいにはたどり着いて、元気に暮らしているんじゃないかと思っている（捨てガメにはよくあることらしい。カメの生命力恐るべし）。

先日、ゼニちゃんに遅れること十年ほどして、妹が家を出て行った。出ていくまでは色々とききもきしていたが（すまん妹よ）、今ではほとんど心配していない。妹もまた、ゼニちゃんの心意気を継いでいるはずだから。

そういうわけで、私は妹の仕事を引き継いで、週に一回モモちゃんの水槽を洗っている。水槽を独占することになったモモちゃんは、伸び伸びと育っている。どうやらモモちゃんは今のところ、うちで暮らすことに納得してくれているらしい。一安心である。

>了<

(後書き)

飼ってるカメを思って書きました。
大体フィクションです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7782s/>

二匹のカメの話

2011年10月9日00時27分発行